

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
139
2018.12

公益財団法人PHD協会
2018年度会報139号

PHD Movement vol.22

ダリットの女性を生きる

「私は差別に負けない」

ネパール・被差別カースト「ダリット」の
女性たちの想い



PHD LETTER Volume.139

Contents

- P.2 防災研修
- P.3-6 **PHD Movement** vol.22
- P.3-4 ダリットの女性を生きる
- P.5-6 私は差別に負けない サビナさん、インタビュー
- P.7-12 2018年度研修生レポート
- P.7-9 レニ グスティカ サビナ・ビスンケ・ラムテル
サンダーモー (モーモー)
- P.10 2018年度研修生 4月～10月研修
- P.11 退職の挨拶 研修担当 高藤 真理
- P.12 サンダーモーさん、神戸真生塾で研修
- P.13 タベ村に滞在して 2018.9.10-27 国内研修生 清水 悠加
- P.14 PHD活動紹介 2018年7月～10月
- P.15 PHDNews

表紙写真/ダリットの女性グループ「ハラバラ:ネパール語でEvergreen(いつまでも新鮮な)の意」のメンバー ネパール・ジドゥルボカリ村

～医師となりネパールで働くきっかけ～

温故知新 岩村語録 その14

広島での原爆体験がきっかけだった。当時、広島高等工業に在学しており、勤労奉仕で学内にある薬品倉庫で薬品の梱卸しをしていたとき原爆に見舞われた。壊れた倉庫の瓦礫の下敷きになり、人事不省のまま丸二日間過ごした。けれども、幸い人に助け出されて、生命をとりとめることができた。もし意識不明になっていなかったら、残留放射能のあふれる市内を歩き回って、放射能を浴びて死んでしまっていたのに違いありません。そのとき私はこう考えたのです。「いたい、なぜおれみたいな人間が生き延びることができたのだろう」。

そして私は、戦争に関わる人生でなく、人助けに徹する人生を生きようと決心し、医者之道を選んだのです。

「出典：共に生きるために(1982年) P.20」



PHD運動提唱者 岩村昇先生のネパールでの足跡をダリットの女性グループに話す。(2018年7月ネパールにて)



PHD

PEACE, HEALTH&HUMAN DEVELOPMENT

公益財団法人PHD協会

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年に今井鎮雄(初代PHD協会理事長)と共にPHD協会を設立しました。

PHD LETTER 139号

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区
山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
電話：078-414-7750
FAX：078-414-7611
E-mail：info@phd-kobe.org
URL：http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会
01110-6-29688

防災研修

阪神淡路大震災以来、防災を考えてきたPHD協会。2015年春発生したネパール大地震の復興支援活動を通して、改めて防災の重要性を認識し、来日中の研修生に対し、防災研修を実施しています。

中西 美樹 = 文

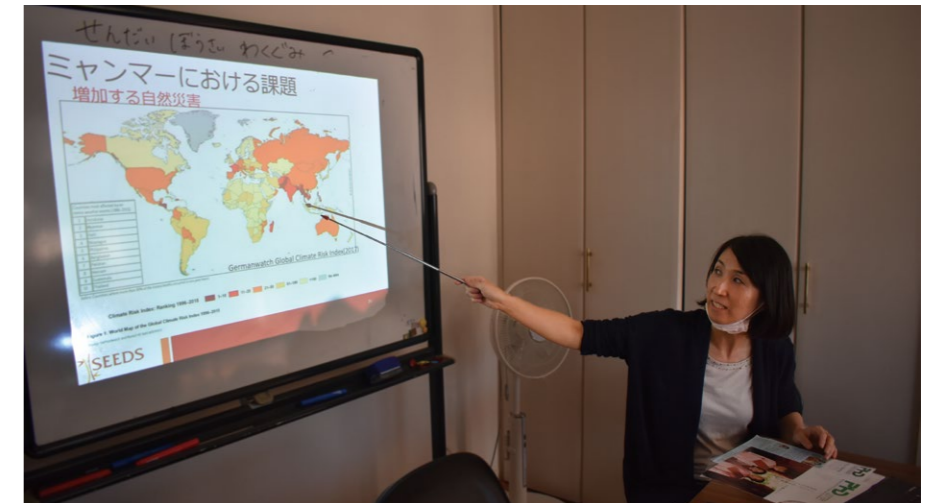
PHD協会の防災研修は外務省NGO事業補助金により実施しています。

2015年4月、ネパールでM7.8の大地震が発生しました。多くの方が亡くなり、当会の研修生招へい地域であるカブレパランチョーク郡も大きな被害を受けました。また、今年の9月にインドネシアのスラウェシでもM7.5の地震が起きたことは、記憶に新しいかと思えます。世界各地で起こる災害は他人事ではなく、世界中どこでも誰にでも起こり得ます。

この様なことから、PHD協会は、将来の村のリーダーとなる研修生たちに、防災の知識と訓練が必要だと考え、2017年度から防災研修を行っています。

今年の防災研修の第1回は、SEEDS Asiaから大津山光子先生をお迎えし、「防災の仕事」「災害マネジメントサイクル」「ミャンマーにおける課題」などについてお話し頂きました。この中で研修生は、増える災害リスクや自助と備えの大切さなどを学びました。

研修生にとっては初めての防災研修でしたが、「災害が起こる前に準備することは大事だと思った。昔のネパールの災害についてももっと学びたい(サビナ)」、「一瞬で生活が壊れてしまう災害の恐さを感じた。災害の準備についてももっと勉強したい(モーモー)」、「インドネシアの学校で避難訓練



上/第1回防災研修講師の大津山光子先生(NPO法人SEEDS Asia)

右/大津山先生(中央右)と研修生(左端:モーモーさん、中央左:レニさん、右端:サビナさん)



ができればいいなあ。たくさんの人が犠牲になるのは怖い(レニ)」と、防災の必要性をそれぞれに感じ取り、今後も学んでいく意欲を持ってくれました。

今後さらに8回の防災研修を予定、全てHyogo Network of Copemates for International Cooperation (HYOMIC)の所属団体に講義をお願いしています。各団体とも、国内外で防災に取り組んで来られた経験・ノウハウが豊富で、研修生たちは防災について、より詳細に実践的に学ぶことができます。

以前、研修生に「防災で私たちに何ができるとおもいますか?」と尋ねたことがありました。研修生は、「災害が起きたら、政府か軍隊が来ます。私たち村人にできることは何もないです。」と答え、驚いた覚えがあります。ですが、これは彼らとしては普通の感覚かもしれません。そして、そんな研修生たちにとって、むしろこの研修は防災について学ぶ良い機会になると考えます。災害への備え、また災害が起こった時に、私たち市民は何かができるのでしょうか。この防災研修で、研修生たちには多くを学んでもらいたいと思っています。



2018年夏のネパール出張中に遭遇した土砂崩れ。雨期とはいえ、現地の人が驚くほどの雨が短時間に降り、土砂崩れが私たちの車両の前後両方で発生しました。しかし、日本のように通行止めになることもなく、危険な状況の道路を進むことになりました。

【今後の予定】

◇11月

認定NPO法人 Future Code

認定NPO法人 まち・コミュニケーション被災地NGO協働センター

NPO法人 CODE海外災害援助市民センター

NPO法人 プラス・アーツ

NPO法人 アジア眼科医療協力会

◇12月

NPO法人 エフエムわいわい

NPO法人 多言語センター FACIL



2015年4月の地震で損壊し、放棄された自宅にたたずむダリットの女性。



サビナさんの住むジトゥルポカリ村はカトマンズから車で3時間半ほどの山間の村。住民のほとんどはダリットの階層に属する「サルキ」と呼ばれる人々である。村には一世帯のみ、バフン(司祭)階層の家があるが、その家はクリスチャンとのこと。



Feminist Dalit Organization(FEDO)のドゥルガ・ソブ代表。FEDOはネパールにおいてダリットの女性の差別解消と地位向上のために活動するNGO。2018年8月FEDOカトマンズ事務所を訪問した際、ドゥルガ代表にダリットの女性の歴史や現在の状況を詳しく説明いただいた。

PHD Movement vol.22

ダリットの女性を生きる

ネパールの被差別カースト「ダリット」概説

前回138号で紹介したようにサビナさんはダリットと呼ばれる最下層のカースト出身である。PHD協会としても初の招聘となるので、サビナさんを迎え

ることになった昨年度から継続してダリットについて学んできた。

2018年7月に「反差別草の根交流会『サマンタ』」の山本愛さん、8月にネパールにあるFeminist Dalit Organization(FEDO)のドゥルガ・ソブ代表という二人の専門家からお話

【ネパールのカースト制度】(表1)

1と2を合わせた人口比 29%	1. バフン (ブラーマン: 司祭)
	2. チェトリ (クシャトリア: 軍人)
ダリットの人口比 13%	↑ 浄カースト「高位カースト」
	3. ヴァイシャ (商人)
ダリットの人口比 13%	↓ 不浄カースト「低位カースト」
	4. シュードラ (隷属民)
	ダリット (不可触民)

出典:1854年制定ネパール民法典より (人口比は2001年国勢調査から)

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

しを伺った内容を紹介させていただきたい。

ネパールのカースト制度

左の(表1) 1~2が高位カーストで、3の商人、その他カーストを挟んで、4が低位カースト、ダリットとなる。意外なのは人口比で13%もいるので、マイノリティとは言えないことである。

ダリットとは?

- インドの不可触民解放運動から生まれた言葉「抑圧されたもの」「壊されたもの」の意。
- 別名、被差別カースト、不可触民、職業カーストとも呼ばれる職人集団。
- カースト制度の最下層、「不浄」な存在。
- 門地(生まれ)・職業に基づく差別。

国家統一の手段として政治的に設置

不可触制とは?

- 穢(けが)れの意識に基づく。
- ダリットが食物や水に手を触れると、その食物はけがされ、高位カーストはそれを口にすることができない。
- 穢れは「うつる」と考えられていた。
- 触れることは勿論、影をふむことすら禁じられていたことも。
- 日本にも残る女人禁制の「伝統」、死の穢れなど。

ダリットの伝統職業

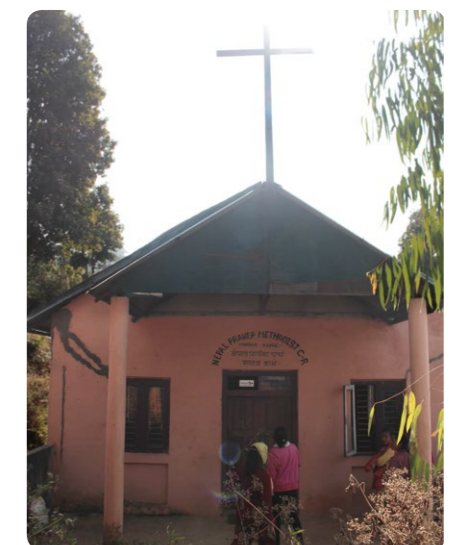
- 竹細工: ドム
- 鍛冶師: ビショカルマ(カミ)
- 楽師・仕立て師: パリヤール(ダマイ)
- 皮革加工: サルキ
- 吟遊詩人: ガンダルバ(ガイネ)
- 漁師・太鼓作り: バディ(女性は売春も)
- 清掃作業員: ポデ

ダリット女性が抱える課題

- 不可触制
 - 女性に対する暴力(家庭内暴力、性的搾取、レイプ、人身売買)
 - 健康問題(栄養失調、子宮脱、HIV/AIDS)
 - 貧困(土地なし、失業、農業労働、不平等な賃金)
 - 異カースト間結婚の9割が離婚
 - 教育機会からの排除(8割が非識字者)
 - 人権侵害(カースト制度による差別を否定する法があっても、不完全な実施になってしまっている。)
 - ネパール内戦(1996-2006)の影響(レイプ、行方不明、殺害、性的搾取、寡婦)
- (出典: FEDO/サマンダ)

上記はダリットにまつわる一部の情報だが、これだけでもダリット、特に女性がネパールへの社会の中で、どのような立場に置かれているかがよくわかる。サビナさんが常々、「ダリットへの差別があるが、さらに女性への差別もある」言っている通りである。そこ

で次項ではサビナさんが経験した出来事について語ってもらった。



ジトゥルポカリ村にあるメソジストの教会。カーストと密接に結びついたヒンドゥー教を信仰する人々が多い中、ダリット差別から離れるためにクリスチャンに改宗する人々も少なからずいる。しかし、残念ながら改宗しても、周囲からダリットとして差別を受け続ける場合が多い。



PHD Movement

私は差別に負けない

サビナさん、インタビュー

2018年4月 サビナさん、生まれて初めて見る海にて。(兵庫県大蔵海岸)

サビナさん、インタビュー

Q:最初にサビナさんがダリットとして差別を受けたと感じたのはいつ?

サビナ:子どもの時、学校に行った時に友だちと話していると「あなたはサルキの子ども」と言われた。なんでそんなことを言われたんだろうと思い、家に帰っておばあさんに聞いてみると「私たちはサルキだからそう言われたんだよ。私たちは他の人に触ってはいけないし、パフンの家に入っていくのはいけないし、レストランに入る時にも聞かずに入っていくのはいけないよ」と言われた。差別を意識したのはその時が最初。ダリットだから、レストランに食べに行く時もダメだと言われたら外で食べないといけない。

Q:学校での差別は?

サ:クラスには22、23人がいてダリットは

3人。私は6歳ごろから学校に通っていたがダリットの子どもたちは入学が遅れることが多い。みんなは「奴らはサルキの子だ」と言っていた。私たちは「なんでそんなことを言われるんだろう」と思っていた。

ある時、授業中に「サルキの子どもだ」とクラスメイトに馬鹿にされたので、頭にきて思わずその子を思いっきり叩いたことがある。その後、そういうことは言われなくなった。誤解がないように言っておくと、今も仲良しですよ(笑)。

Q:仕事では?

サ:ダリットは田畑を持っていないことも多いから高位カーストの田畑で小作労働をすることが多い。貴重な現金収入だけど、私は行かない。なぜならそこでもダリットということで馬鹿にされたりするし、ダリットが高位カーストの下で仕事をもらう、というこ

とを続けていると構造的にも差別から抜けられない。だから私は決して働かない。



水田で作業するダリットの小作の女性たち。

Q:ダリットの中でも女性はさらに差別される?

サ:そう感じる時はいっぱいある。ネパールでは、男性はどこに行っても何をしてもいいけど女性は〇〇に行くな、〇〇をするなとあれこれ言われる。学校にも行かせてもらえない場合もある。女性は結婚したら嫁ぐので教育にお金をかけないでいいと言われるが、男性は親の面倒をみってくれる



サビナさん(右端)と水汲み場。様々な階層のカーストが共有する水汲み場では、ダリットの人たちが不当な差別を受けることもある。

ので教育を受けさせてもらえる。

他にはダリットの女性となると、仕事も就けない。勉強してもダリットなのにどうするの?とからかわれる。読み書きできない人が多く、ハラバラ(村のダリットの女性グループ)には38人のメンバーがいるが、読み書きは私を含めて3名*しかできない。

*参考:ネパールの識字率65.9%(2011年 日本国外務省)

Q:1番悔しかった時は?

サ:水を汲みに行った時、タンクをいっぱい持って車に積んで帰ろうとした。その時に(車がすぐにでしてしまうから)最初に汲んでもいいかと聞くと、ダメだと言われ、車は行ってしまった。その日は一つしか持って帰れず、何日かかけて順番に持ち帰った。悔しかったので、「今はそんなことを言っているけど、これからはそういうことをさせない」と言った。その時は根拠は無かったけど、その後、PHDの研修生に選ばれたという事を知って、その人たちの態度が変わって、距離が近くなることができた。

もう一つは結婚を知らない間にセッティングされたこと。まだ勉強をしていたかったので結婚をしたくないといったが、女という理由で18歳の時に結婚させられた。

Q:結婚したくないとは言えなかった?

サ:16歳ぐらいの時から周りに「結婚しろ」と言われていた。親だけでなく親族にも言われていた。元々、夫は別の女性と結婚する話があったが、夫は私のことが3年前から好きだったので、その話は破談になったみたい。夫の両親が自分の両親のどこ

ろにやってきて結婚させてくださいと言って、結婚話が進んでいった。私は結婚したくないと言ったが周りは拷問のように結婚しなさいと言ってきた。良い人だからと説得されて。結婚しないなら死んだと思った方がよいとまで言われたので、泣く泣く結婚をすることになった。最初は嫌だったので、結婚してからの1~2カ月は夫と口を開きませんでしたよ(笑)。

Q:地震の時も差別があった?

サ:家を建て直す時、最初はブラーマンから。サルキは最後だった。しかも彼らの家は団体から支援が届き部屋が多い綺麗な家が建て直されたが、サルキにその支援はなく、政府のお金を使ったため小さい家になった。

Q:研修生に選ばれたことの影響は何かある?

サ:結婚して嫁いだ先は田舎で、なんでこんなに遅れているんだろうあと考えていた。最初は知らない土地に一人で大変だったけど、女性グループに顔を出すようになった。最初は無料で勉強を教えてあげると言っても、村の人たちは、直接は言わなかったけれど、「来たばかりの子に何が出来る」と思っているような感じだった。日本に来ることが決まってからは周りが自分に関心を持ってくれるようになった。日本からの帰国後は自分の話を聞いてくれるようになるのではないかと期待している。

Q:帰国後は何をしたい?

サ:帰ってからは女性の地位向上に携わり

たい。女性は家から外に出してもらえない。何かした場合、男性から嫌なことを言われる。病気になっても、怖くて伝えられない。日本では皆に敬意を払っているように感じる。差別を無くすことを勉強し、女性の地位向上を成し遂げたい。ただやりたいのは普通のこと、好きな場所に行って、好きなことをする、そのことを妨げられないようにしたいだけ。

Q:具体的には?

サ:自分で収入を得られるようになれば家計を助けることができる。お金を稼ぐことによって女性は外に出かけられるようになる。読み書きができれば周りから馬鹿にされたりすることも少なくなると思う。国からダリットのために充てられたお金があるので、読み書きができればそれを使えることができるし、意見を発信できるようになると思う。

インタビューを終えて

サビナさんは上記のインタビューによく表現されているように差別に負けない強い心を持った女性である。印象的だったのはサビナさんの選考時に家庭訪問をした時のこと。家族に「サビナが日本で一年間研修すること」の是非を聞いたところ、全員が「ぜひ連れて行ってほしい」と口を揃えた。嫁いできたばかりの嫁をここまで喜んで送り出すことは、日本では難しいのではないだろうか。その真意を聞くと「彼女が日本で研修することでダリットの地位向上につながる」と。加えて「他の候補者でもいい、この村から誰かが行って欲しい」とも。

今や日本に住むネパール人は約74,000人で国籍順で6番目となっている(法務省2017年)。ちなみに7番目はアメリカ人で55,000人。しかしながらその中にダリットの人はほとんどいないと言われている。そんな中、サビナさんは地域からの希望の光として来日した。その期待に負けず日本で意欲的に学んでいるサビナさん、帰国後の活躍が今から楽しみである。

PT 2018年度研修生レポート

高藤 真理 芳田 弓生希=文・編集



レニ グスティカ

インドネシア / 23 歳

にほんのほいくえんは、きゆうしよく
 があります。こどもたちのひるごはん
 をほいくえんでつくります。みんな
 好きなじです。たべものはおいしいか
 があります。はみかき、てあらい、ひるね
 とかちやんとします。それからこども
 たちは1かひつ1かいたいじゆうと
 しちゆうをほいくえんが、おちあやと
 えほんたふさんあるからこどもたち
 いろいろあそびごとがでます。
 こどもたちがほいくえんにいる
 じかたがなかいでます。
 インドネシアのわたしのむらにある
 ほいくえんではきゆうしよく、はみかき、
 てあらい、ひるねとかあそびます。
 それからこどもたちはたいじゆうと

しちゆうもほいくえん。おちあやとえほん
 ずくないでずからけんかします。ほいくえん
 のじかたはみじかいでず。
 わたしはにほんでけいさいのぜんそくを
 しました。かたがみをつくる、ぬきぎ、
 それからミソをつくる、ひんがし、はじめでず。
 いろいろあそびごとをつくりました。たふは
 ンボース、ひく、スカート、ズボンでず。い
 はんおすかしかつたのはかをかみ、
 かうす、えり、とおもいました。わたしのむら
 ではけいさいのしごとをくくるひとは
 いないでず。わたしでずたらいい
 とおもいました。

レニグスティカ

「自身が暮らす村で仕事をする ヒントを見付けました」

レニさんが暮らすカエジャングイ村は、世界最大の母系
 社会の一部で、住民の職業は農業が中心です。
 彼女は自宅の農業や売店を手伝い、子どもたちにコー
 ランを読むためのアラビア語を教えるボランティアに取り
 組んでいます。彼女自身の生業はまだ見付けられていま
 せん。日本では、保育研修で子どもたちの栄養管理や健

康管理について、理解を進めています。同時に洋裁の研
 修に取り組んでいます。来日して初めてのチャレンジであ
 る洋裁は、型紙作製から裁断、縫製という一連の作業
 を通して、その難しさを実感し挫折しそうな時もありまし
 ましたが、今では「村で洋裁の仕事ができればいいな」とい
 う思いが芽生えています。
 レニさんが村に戻ったら、自身の足で立つことができる
 仕事として、なにより村の生活の発展につながる仕事とし
 て、洋裁という目標が見え始めました。

PT 2018年度研修生レポート



サビナ・ビスンケ・ラムテル

ネパール / 20 歳

日本のほいくえんは、きゆうしよく
 があります。えいようのこどもをかんがえて
 きゆうしよくをつくります。だから
 こどもたちのけんこうにいい
 とおもいました。ようちえんで
 はあじがうすいごはんを
 たべたり、ひるねをしたり、
 パンツをかえたりするから
 日本のこどもたちのからだは
 すこくげんきだなとおもいました。
 そしていろいろあそびごと
 あそびますからこどもたち
 がうれしそうにきもちが
 いいです。

わたしのむらにはほいくえん
 がないからこどもたちは4さい
 と5さいになったらからごうに
 いきます。でもからごうにこども
 たちのためのトムレとか
 あそびのおもちやとかきゆうしよく
 がありません。日本のこどもたちは
 おむつをつかいます。でも、
 わたしのむらのこどもたちは
 あまりつかいません。わた
 のむらにみずがないから
 こどもたちはあそびごと
 むらしたじくをまいちあそびな
 いでほします。きたないからあそび
 うにしたいです。

サビナビスンケラムテル

「健やかな子どもの成長に 必要なことを学びました」

サビナさんが嫁いだジトゥルボカリ村には、保育所が
 ありません。4～5歳になり小学校に通うまでは、家庭
 を中心に過ごします。公園のような広場はなく、同じ年
 頃の乳幼児と一緒に遊ぶことが少ないそうです。
 有機農業や保育研修を通して、安全な食事について
 学びました。特に乳幼児は、成人の食事より薄味で間

食が必要なこと、バランスのよい食事が大切です。食事
 以外には、乳幼児のトイレトレーニングや清潔な衣服の
 大切さを学びました。そして、乳幼児の頃から、外で
 遊び、保護者以外の人と関わるという刺激も、成長に
 必要だということを知りました。
 サビナさんが日本で学びたいテーマは、もう一つあり
 ます。「人権」です。子どもたちの健やかな成長も、子
 どもの権利の一つだということにこれから気付くこと
 でしょう。

PH 2018年度研修生レポート



サンダーモー (モーモー)

ミャンマー / 31歳

にほんのほいくえんとしやうがっこうと、
じどうようごしせつはとしやかんが
あります。ほいくえんのせんせいはこども
たちにほんをおみます。こどもたちが
ききます。にほんのほいくえんはちいさ
こどものトイレとおあきこどもの
トイレがべつべつにあります。にほんの
ほいくえんのせんせいはやさしいです。
だからこどもたちはせんせいの
はなしをききます。ちやうりしんは
ごはんのつくりかたをべきょうしました。
たべものはいいからみんなげんき
です。にほんのしやうがっこうではこども
たちはがっこうでひるごはんを
たべます。おんがくしたいとプール
とかべんきょうします。にほんのしやうがっこう
のせんせいはおしえるのがじやうずです。

きょうざしをつかておしえます。こど
もたちはべんきょうがたのしいです。
おんがくしたらわたしのこじいん
としやかんとちいさいこどものトイレを
つくりたいです。わたしのこじいんの
こどもたちはほんがすきです。こじい
んのこどものトイレはおあきです。
ちいさいこどもたちはたいへんです。
ちいさいトイレがほしいです。わたしの
こじいんのせんせいはあまりおしえるのが
じやうずじゃありません。こどもたちは
たのしくなりました。わたしのこじいんの
せんせいにきょうざしでおしえるの
はいいです。はなしをききます。わたしも
きょうざしをつかておしえます。
かんばります。

サンダーモー

「子どもたちが元気に過ごし、
楽しく学べる授業をしたい」

モーモーさんが暮らすシュエグニ孤児院では、100人近
くの子どもたちが生活しています。彼女は、日常的に子
どもたちの教育や健康管理に携わっていますが、特にそれ
らについて学んだことはなく、手探りで実施しています。
日本の小学校の研修では、教材を使った教授法や体

験型授業を学びました。ミャンマーの小中学校の授業は
一方通行で、質問もあまりしてはいけない雰囲気がある
そうです。このような背景で教育を受けてきたモーモーさ
んにとって、日本の教育は新鮮で刺激的で、生徒が楽し
そうに授業を受けていたことが印象的だったようです。
シュエグニ孤児院に戻ったら、子どもたちが楽しく学
ぶことのできる授業を孤児院の他の先生に伝えて、自ら
も実践したいと考えています。

2018年度研修生 4月～10月研修

■ レニさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
滞在: 宝田和正さん、てるみさん
友愛幼稚園 (神戸市/保育)
高木育代さん (神戸市/洋裁)
高砂市立阿弥陀小学校 (高砂市/初等教育)
滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
たいようこども園 (養父市/保育)
滞在: 室見千尋さん
高木育代さん (神戸市/洋裁)
はらっぱ保育所 (西宮市/保育)
滞在: 前田公美さん

■ サビナさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
滞在: 金子晃司さん、洋子さん
のぞみ保育園 (神戸市/保育)
渋谷富喜男さん (神戸市/有機農業、野菜)
神戸YWCA保育園 (神戸市/保育)
円谷利行さん、豊子さん
(篠山市/有機農業、野菜)
あぐる農園 和田明男さん、希代子さん
(篠山市/有機農業、野菜)
のり・たま農園 坂口典和さん、玉山ともよさん
(篠山市/有機農業、野菜)
滞在: 円谷利行さん、豊子さん
高砂キッズ・スペース (高砂市/学童保育)
滞在: 神吉泰彦さん、道子さん

■ モーモーさん

神戸YMCA学院専門学校 (神戸市/日本語)
滞在: 黒野美代子さん
はらっぱ保育所 (西宮市/保育)
滞在: 前田公美さん
高砂市立阿弥陀小学校 (高砂市/初等教育)
滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
椋山女学園大学附属小学校
(名古屋市/初等教育)
滞在: 渡辺観永さん

松江市健康部・子育て部 松江市/保健衛生)
滞在: 佐藤玲子さん、山本志歩美さん、
浜村愛子さん、中尾千代子さん
高木育代さん (神戸市/洋裁)
ステップハウス (高砂市/ハンディキャップガイド)
滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
高木育代さん (神戸市/洋裁)
とくなが小児歯科クリニックレオ
(川西市/口腔衛生)

ステップハウス (高砂市/ハンディキャップガイド)
滞在: 神吉泰彦さん、道子さん
ひょうご部落解放・人権研究所
(姫路市/人権、フィールドワーク)
丹南健康福祉センター (篠山市/保健衛生)
滞在: 円谷利行さん、豊子さん
はらっぱ保育所 (西宮市/保育)
滞在: 前田公美さん
ひょうご部落解放・人権研究所、
部落解放同盟兵庫連合会 (神戸市/人権)
部落解放同盟伊丹支部
(伊丹市/人権、フィールドワーク)
滞在: 佐藤寅夫さん、重子さん

PH 2018年度研修生レポート



レニさん(右)と上田千恵先生(左) たい
ようこども園にて。



サビナさん(左)と坂口典和さん(右) の
り・たま農園にて農業研修。



子どもと折り
紙を折るモー
モーさん。杉
の子保育園に
て。



左上/高木育代さん(洋裁研修)宅にて、真剣な表情でミシンを操作するレニさん。 右上/杉の子保育園で子どもと遊ぶモーモーさん。 左下/部落解放同盟伊丹支部で兵庫県連合会副委員長池田千津美さんの説明を聞く、サピナさん。 右下/研修のふりかえりを行う、研修生3人。研修担当や国内研修生の助けを借りながら、研修で気づいた点、帰国後に生かせそうなことなどを、このふりかえりでまとめます。

PH 2018年度研修生レポート

PH 2018年度研修生レポート

サンダーモーさん、神戸真生塾で研修

遠藤 響子 清水 悠加=文

ミャンマーの研修生サンダーモー（以下、モーモー）さんは、2018年8月に合計17日間、神戸真生塾において研修を受けました。

神戸真生塾は様々な理由で、家族と離れて暮らさざるを得なくなった子どもたちが生活する児童養護施設です。今回の研修で、モーモーさんは神戸真生塾に暮らす子どもたちと生活を共にし、日本の養護施設の仕組みや、子どもたちが健やかに暮らすための工夫を体系的に学びました。子どもたちが職員の方々に「おねえちゃん！」と元気よく呼ぶ姿や、彼らが主体的に企画・運営をする納涼大会などの交流から、職員の方々との厚い信頼関係のもと、活き活きと

暮らす子どもたちの姿がモーモーさんにはとても印象に残ったようでした。

ミャンマーでのモーモーさんの24時間は、シュエグニ孤児院の子どもたちのためにあります。彼女は朝早く起き、子どもたちと共にご飯を作り、彼らに勉強を教え、共に活動し、夜も子どもたちと一緒に眠りにつきます。

そんなモーモーさんが日本の児童養護施設での生活を体験しました。清潔なトイレ、個別に与えられた寝室、そして栄養バランスの取れた毎日の美味しい食事。これらに彼女はとても驚き、研修後の第一声はこの環境への賞賛でした。そして「就寝時の読み聞かせ」のような、シュエグニ孤児院で



もすぐに出来そうな事を二言目に挙げ、子どもたちのために、より良いシュエグニ孤児院にしたいと、常に考えている彼女の目は輝いているように見えました。

子どもたちにたっぷり愛情を注ぐ真生塾での研修を終えたモーモーさんは、具体的な試みや学んだことをたくさんたずさえ、来年の春、彼女を待つシュエグニ孤児院へ帰ることができるのではないのでしょうか。

下写真/子どもたちと夕飯の買い物に行くモーモーさん(左端)。その日の夕飯はモーモーさんが作ったミャンマー料理でした。

退職の挨拶

研修担当 高藤 真理

年度途中の退職ということで大変恐縮ではございますが、12月末を持ちましてスタッフから支援者へ戻ることになりました。34期生から開始した口腔衛生と防災に関する研修の支援や、研修生の村での活動に今後も取り組ませていただく予定です。

僭越ですが、海外で歯科医療に従事するという自身のチャレンジが、PHD協会の更なる発展と草の根事業の継続に寄与できますよう励んでまいりたいと思います。

研修生の研修同行を通して、日本の現状について多くの学びがありました。また、研修生の学びたいという真摯な姿勢に触発され、共に学ぶ楽しさを経験しました。

最後になりましたが、皆さまにお支えいただき当会研修担当に従事することができました。心より感謝申し上げます。

事務局長補足

研修担当高藤に関しては元々が前任の急速の退職に伴い、ピンチヒッターとして着任いただいた経緯があります。よって、今回の退職は残念ではありますが、既定路線とも言えます。当会の窮地を救ってくれたことに感謝しつつ、喜んで送り出すと共に今後もアジアの現場で口腔衛生について協働していきたいと思えます。

東日本研修旅行で訪れた東京タワーにて研修生と記念撮影。(高藤真理：左から2人目)



REPORT

タベ村に滞在して 2018.9.10-27

PHD国内研修生として、インドネシア・西スマトラ州のタベ村に清水悠加が滞在しました。PHDでは2019年度も国内研修生を募集します。（募集要項はP.15のQRコードよりアクセス）
清水 悠加=文

清水悠加(中央)、左端は2017年度研修生
デフィさん



今回のインドネシア滞在では、元研修生の暮らす村のこと、インドネシア・西スマトラのミナン文化や宗教、そしてPHD協会の活動をより理解することができ、とても貴重な19日間を過ごすことができました。

西スマトラの「美しい村・タベ村」

まず、タベ村について。村に入った途端、道路わきにたくさんの花が植えられ、“Selamat Datang!(ようこそ!)”と書かれた看板がいくつもあり、他の村にはない明るさを感じました。正直、もっと整備されておらず何も無いことを想像していたので、少し驚きました。村に滞在するうちに、村の入り口の看板や花壇は、帰国した元研修生や村の人々が力を結集して、少しずつ整備してきたものであると知り、「自分たちで村をつくっていく」村の人々の力強さを感じました。家族や親せきが近くに住み、村の人はみんな知り合いだからこそ、みんなが当事者意識を持って村のために何かするということがとても素敵に感じました。ホームステイ先の親切な家族、部屋に毎日遊びに来る子どもたち、道で話しかけてくれる村の人など、タベ村の人々は日本から来た私にも家族や友だちのように接してくれます。翻って日本での生活を振り返ってみると、特に一人暮らしをしている間は隣に誰が住んでいるか分からない、町内会があるのかも知らないなど、大きなギャップを感じるとともに、少し寂しいなと思いました。

タベ村は西スマトラの美しい村として発展しています。その姿はインドネシアのテレビ番組に取り上げられるほどです。滞在中にその番組を観る機会がありました。内

容はミナンの伝統舞踊や、タベ村の協同組合の取り組み、MISタベの子どもたち、黒砂糖づくりについて。村の人々がとても楽しみにしてテレビに食いつくように見ている様子がとても微笑ましく思えました。タベ村は現地の企業の協賛を得て「花の村」として観光地化されようとしていると聞きました。観光地化されるというと、いい面もある面もあると思うので、タベ村は今後どうなるのかとても気になります。

タベ村の教育事情

滞在中には、元研修生たちが設立に大きく関わったイスラム小学校MISタベや幼稚園などの教育現場に訪問できました。MISタベでは、朝の掃除、朝礼（曜日によってコーラン、歌、ダンスなど様々）、授業、売店で朝ごはんを食べる、休み時間など一通り体験することができました。1～6年生まで各2回日本語の授業を行いました。先生も子どもたちも元気に迎え入れてくれ、不安を感じることなく楽しく授業をすることができました。1、2年生のクラスでは子どもたちの元気が良すぎて、收拾がつかないこともありましたが、MISタベの先生が瞬時に日本語とインドネシアの歌を作ってくださいるなど、小さい子どもたちに対する教授法もとても参考になりました。出席率も比較的良好な印象でしたが、貧困家庭の子ども(60/180人)が政府からお金を支給されていること、留年により様々な年齢の子どもが通っていること、雨の日は通学する子どもが少ないなどの問題があると聞きました。また、公務員資格のある先生とそうではない先生の待遇の格差は大きく、後者の給料の少なさにも驚きました。

MISタベと同じイスラムの中学校にも訪問することができ、そこでは保健委員の生徒たちと交流しました。彼らの健康や保健衛生についての関心は強く、日本の保健室や食生活についてたくさんの質問をうけたことがとても印象に残りました。インドネシアのイスラム学校という自分にとっては少し特殊な教育現場に触れることができ、とても貴重な経験になりました。

タベ村での出会いから

最後に元研修生とPHD協会についてお話ししたいと思います。たくさんの元研修生のお家を訪ね、村での生活や研修当時のお話を聞くことができました。健康コンテストでの元研修生やカデール(保健ボランティア)の人々の活躍もそうですが、自分の家庭の生計を立てながらも村のためにずっと努力されている様子を知ることができ、たくさんの人生の先輩たちに出会えたことがとても嬉しかったです。また、昔の職員やホームステイ先の家族、国内研修生との思い出もたくさん聞くことができました。研修旅行中の楽しそうな写真を見ると、今年度の研修生たちが日本で充実した研修生活を送れるようにもっと積極的に関わっていきたくと思いました。また、2019年度研修生選考を通して、NGOスタッフと現地の人々との関わり方を学びました。初めて村に来た自分に対して、人々が親切にしてくれたのは、これまでのPHDに関わる全ての方々の取り組みのおかげだと感じました。インドネシア滞在で吸収したことを原動力に今後のPHD協会での研修に取り組んでいきたいと思っています。

PHD 活動紹介 2018年7月～2018年10月

7月

- 2日 チームひょうご・ネパール地震被災地支援報告会:NGO相談員 (坂西、高藤)
- 4日 阿弥陀小学校職員研修 (高藤)
- 8日 米山記念奨学セミナー:NGO相談員 (坂西、高藤)
- 11日 ESD拡大運営委員会 (八木)
- 14日 大阪女学院大学ミャンマーツアー事前説明会 (坂西、高藤)
大阪女学院大学ワークショップ (坂西、高藤)
- 17日 CSネットワークフォーラム神戸開催打ち合わせ (坂西、酒井)
- 19日 HYO GON Meetup第4回 たつ (坂西)
加古川中央ロータリークラブ例会 (演)
- 20日 民間助成制度説明会 (坂西、芳田、酒井)
- 21日 加東市連合婦人会 (坂西、高藤)
- 25日 職員研修ダリット学習:サマタン山本氏 (坂西、高藤、中西、八木、芳田、酒井)
篠山ロータリークラブ納涼例会 (演、酒井)
大阪YMCA評議員 (坂西)
- 26日 定例スタッフ会議 (坂西、高藤、中西、八木)
- 27日 川西ロータリークラブ例会 (演)
ネパールスタディツアー(～8月4日) (坂西、八木)

8月

- 6日 第15回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー (～7日) (坂西、中西)
- 9日 ESD拡大運営委員会 (八木)
- 18日 川西ロータリークラブ主催池田花火大会 (演)
- 19日 ミャンマースタディツアー (～29日) (坂西、高藤)
- 22日 篠山ロータリークラブ例会 (演)
- 23日 加古川中央ロータリークラブ例会 (演)

9月

- 4日 青年海外協力協会小島氏来訪 (坂西、酒井)
- 5日 大阪女学院大学 ミャンマー・スタディツアー事後授業 (坂西、高藤)
- 6日 加古川中央ロータリークラブ例会 (演)
- 8日 ガールスカウト兵庫県第24団(加古川)講演:NGO相談員 (高藤、芳田)
ガールスカウト兵庫県第24団(加古川)街頭募金 (高藤、芳田)
- 9日 国際ロータリー第2680地区 米山カウンセラー・奨学生合同ミーティング、交流会 (芳田)
- 8日 インドネシア出張 (～16日) (坂西、中西、演、酒井)
阿弥陀小学校交流会(芳田、遠藤、清水)
- 14日 川西ロータリークラブ例会 (高藤)
京都北ローターアクトクラブ (高藤)
- 19日 ESD拡大運営委員会 (八木)
- 21日 阪神シニアカレッジ (坂西)
- 22日 HYO GON MeetUP (坂西、八木、演、古寺、芳田)
- 25日 NGO等向け事業マネジメント研修(基礎編) (演、芳田、酒井)
柏原中学校 (坂西)
- 26日 NGO等向け事業マネジメント研修(応用編) (～27日) (坂西、酒井)
篠山ロータリークラブ例会 (演)
- 28日 三木ロータリークラブ卓話 (坂西)
- 29日 第3回ESD実践研究集会:NGO相談員(～30日) (坂西、八木)

10月

- 1日 神戸NGO協議会 (坂西、中西、高藤)
- 2日 アーユス仏教国際ネットワーク枝木氏、寺西氏来訪 (坂西)
- 5日 川西ロータリークラブ例会 (演)
- 6日 定例スタッフ会議 (坂西、高藤、中西、八木)
- 8日 神戸須磨ロータリークラブ55周年 (坂西)
加古川ロータリークラブ卓話 (坂西)
防災研修:SEEDS Asia (高藤)
第3回ESD実践研究集会拡大討議 (八木)
- 10日 加古川平成ロータリークラブ卓話 (演)
- 11日 インドネシア出張 (～15日) (坂西、高藤)
- 13日 神戸市シルバーカレッジ学園祭 (川原)
ソディ例会 (川原、芳田)
- 15日 ひょうご五国+ワールドフェスタ説明会 (演)
- 17日 篠山ロータリークラブ例会 (演)
- 18日 加古川中央ロータリークラブ例会 (演)
- 19日 福知山淑徳高校:NGO相談員 (坂西、酒井)
関西学院大学:NGO相談員 (坂西、酒井)
ダサイン祭り(ネパール) (坂西)
- 22日 下半期検討会議 (坂西、高藤、中西、八木、演、芳田、酒井)
国際交流フェア会議 (酒井)
- 27日 神戸YMCA秋祭りバザー (中西)
- 31日 奈良育英西中学校・高等学校:NGO相談員 (坂西、高藤)

7月7日の高砂市内、大雨による増水で氾濫寸前の加古川。2018年夏の西日本豪雨災害は兵庫県下にも甚大な被害をもたらし、PHDの研修も大きな影響を受けました。



第3回ESD実践研究集会でのポスターセッション。ESDとはEducation for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)。研究者や実践者が集まり、2日間熱心にESDについて討議しました。



神戸NGO協議会。神戸のNGOが集まり、神戸市民との連携やアピール方法などについて協議しました。



10月20日はネパール最大のヒンドゥー教のお祭り、ダサイン。額についているのはお米を赤く着色したダサイン・ティカ。



PHD News

◆ 連合、自動車総連の皆様へ感謝!

9月に日本労働組合総連合会様から「連合・愛のカンパ」、10月には全日本自動車産業労働組合総連合会様から「福祉カンパ特別寄贈」をいただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

◆ 研修担当職員1名募集

2019年4月より、研修担当として勤務できる職員を募集します。研修担当にはPHD協会の根幹である研修事業を担っていただきます。アジア・太平洋地域からやってくる研修生の近くで彼らの成長を支える、責任とやりがいがある仕事です。募集詳細はHP(右のQRコードよりアクセス)をご覧ください。

2018年12月には募集説明会を実施する予定です。関心のある方、ぜひご参加ください。

◆ 「日蓮宗あんのん基金」様の助成に採択いただきました。

世界が抱える諸問題に対し、民族や宗教、文化の違いを超え、最も有効な支援を届けるため、様々な社会活動・地域貢献・国際協力を行う団体や活動に支援を行う日蓮宗宗務院 伝道部様の「あんのん基金」より、PHD協会の研修事業へ支援をいただきました。



研修生(左3人)と研修の振り返りをする研修担当(右端)

研修担当
募集要項
はこちら



◆ 2019年度国内研修生2名募集

アジア・南太平洋地域からやってきた研修生とともに学びませんか? 国際協力に興味がある人、世界と日本の今の課題が気になる人、NGOや国際機関で働いてみたい人はいませんか。募集する国内研修生は研修担当と広報・啓発担当の2名です。アジア・スタディツアーや国内研修旅行への同行、インドネシア・日本語講師ボランティア派遣などが経験できます。募集詳細はHP(右のQRコードよりアクセス)をご覧ください。



国内研修生
募集要項は
こちら



2019年度研修生のホストファミリー募集!

期間: 2019年4月中旬～2020年3月中旬の約1年間。来日後の日本語研修中(6週間)は毎日、現場研修開始以降は、月平均1週間～10日程度。12月～3月は、研修内容により月20日程度となります。

経費: 当会規定の食費、滞在費をお支払いいたします。その他、交通費、医療費などは基本的に当会が負担します。

応募条件: 当会事務所から公共交通機関で1時間以内で通える範囲のご家庭。
*詳しくは、お問い合わせください。



スシラさん
女性 22歳
ネパール



プットリさん
女性 21歳
インドネシア



ゼンモーエーさん
女性 23歳
ミャンマー

研修担当 高藤との思い出 ○月×日のPHD協会

サビナ 来日間もない時、高藤と買い物へ。その時「Let's go」と手を振りながら言いました。楽しかった。今もLet's goと聞くと真理さんを思い出します。

モーモー 真理さんはいつもサンダーモーと「ダ」を強調しています(注・三田Sandaとかけたダジャレ)。「私これ好きです」

レニ 退職の話はポートタワーで聞きました。皆でアイスクリームを食べながら。その時、私たちは泣きましたよ。3人で。寂しいです。

注記: この記事作成時、3人とも泣き崩れて大変でした。それだけ絆が強かったことの証かと。感動的でした。

以上、昨年や一昨年と比較すると少し静かなのだけれど、敢えておしゃべりムスメ順

2018年度 帰国報告会のご案内

下記のとおり2018年度研修生たちの帰国報告会を行う予定です。一年の学びや、村に戻ってからの活動計画などを発表させていただきます。お誘いあわせの上、ご参加ください。

日時: 2018年3月2日(土)

13:30～16:30

場所: 兵庫県民会館10階 福の間

神戸市中央区下山手通4-16-3

資料代: 500円

お問い合わせはPHD協会まで

TEL: 078-414-7750

BE KOBE

PHD協会は阪神・淡路大震災20年を機に生まれた「BE KOBE」の理念に賛同し、神戸を拠点とする団体として誇りを持って活動してまいります。